

# ブラームスの時代

Die Zeit des Brahms

堀内泰紀

## はじめに

ブラームス（1833～97）を生んだ都市ハンブルク。エルベ河の河口を遡ることおよそ100キロ、北ドイツの大港湾都市ハンブルクは、12世紀末に神聖ローマ皇帝の勅許による関税の免除以来、急速に発展していった。14世紀になると、バルト海沿岸都市の同盟であるハンザ同盟に加盟、近隣のプレーメン、リュベックとともに自治権を与えられた自由都市としてさらに勢力を伸ばすことになる。ハンザ同盟は、17世紀になると衰微の一途をたどることになったが、ハンブルクは、その後も「自由ハンザ都市ハンブルク」として自主独立の気風を保ちながら、世界に向けてその門戸を開いてきた。ニコライ運河沿いに今も残る倉庫群や、港の周辺に立ち並ぶ商館建築は、ブラームスが青少年時代を過ごしたこの街の繁栄を偲ばせている。何よりも車のナンバープレートの頭につけられた二文字HH（ハンザ都市ハンブルク）からは、今なお市民に息づいている自由ハンザ都市の誇りと気概がひしひしと伝わってくる。

## I

「会議は踊る、されど会議は進まず」と評されたウィーン会議（1814～15年）の結果、旧神聖ローマ帝国の版図内に誕生したのがドイツ連邦（議長国はオーストリア）だった。しかしナポレオンに対する解放戦争で芽生えた統一ドイツ国家への希望に反して、この組織もまだ中世の遺物のような領邦国家群とハンブルクなど四つの自治都市からなるものだった。1815年に結成されたドイツ学生組合（Deutsche Burschenschaft）は、それに抗して統一への国民意識を鼓

舞する運動の中心となった。ところが、1817年学生たちがドイツ民族の政治的統一を呼びかける目的で組織したヴァルトブルクの祭典、さらには1819年に劇作家コツェブー（1761～1819）がロシアスパイの嫌疑をかけられ殺害されるなど学生たちの過激な運動が繰り広げられたため、オーストリアの宰相メッターニヒの巧妙な策謀によって弾圧される結果を招いてしまった。それによりドイツでは、旧体制による反動政治が力をふるうことになった。

ブラームス誕生に先立つこと3年、1830年にパリで起こった7月革命が王朝支配を終わらせたという報せは、ドイツ各地の人々に再び自由と国家統一を希求する声をあげさせた。この民衆の声も結局は反動政治の息の根を止めるまでには至らなかったが、時代は大きな転換期にさしかかっていた。イギリスに端を発した産業革命の波はようやくドイツにも届き、プロイセンは1834年、ついに政治的統一を目指すドイツ関税同盟を発足させた。その結果貿易は活性化され、商業が盛んになり、生活水準も向上した。北ヨーロッパ最大の港を持つハンブルクは、自主独立の道を歩みながら繁栄を謳歌していった。しかしその影では、資本家と労働者の対立が鮮明になり、暴動も頻発するようになった。

文学の世界に目を転じると、その生涯が文学史上、古典主義とロマン主義の時代をおおっているゲーテが、1832年82歳の天寿を全うしている。それとともにドイツ古典主義時代は終末を迎える。巨星ベートーヴェン（1770～1827）が墜ちて5年後だった。音楽の世界でのベートーヴェン崇拜とは異なり、文学の世界では、ゲーテという重圧を跳ね返すため「反ゲーテ」を旗印として、ハイネ（1797～1856）やベルネ（1786～1837）たち「若いドイツ」（Das junge Deutschland）が、ジャーナリズムの発達により時事的な文章を多く発表し、新しい文化現象の先駆けとなっている。ドイツ人の俗物性にうんざりしていたハイネは、7月革命の報に接し「アウクスブルク一般新聞」の特派員として1831年パリに行き、そのまま亡命生活にはいった。20歳のブラームスを天才として紹介することになる『新音楽時報』（Die neue Zeitschrift für Musik）がシューマンによって1834年に創刊されたのも、こうした転換期の文化現象のひとつの現れだったのだ。

II

少年ブラームスの文学への傾倒はよく知られている。1834年『新音楽時報』を創刊し音楽評論にも才能を発揮したシューマンが、その評論活動の模範とした後期ロマン主義を代表する作家、E. T. A. ホフマン（1776～1822）の代表作『牡猫ムルの人生観』（*Lebensansichten des Katers Murr*）（1821）はブラームスの愛読書のひとつでもあった。ホフマンは、その洗礼名A.（アマデーウス）を自分で勝手に使うほどのモーツァルト信奉者だった。判事を務めながら、彼の芸術的才能は文学創作、作曲、音楽評論、そして絵画にまで多彩に発揮された。自伝的色彩の濃い未完に終わった『牡猫ムル』は、猫が語る自伝と、その猫の飼い主である指揮者ヨハネス・クライスラーの自伝が断片的に挿入される、二重構造になっている。幻想的世界を描きながらも、一方では法律家の冷めた目で現実を見つめ糾弾するホフマンの作品は、『クライスレリアーナ』（*Kreisleriana*）などで音楽と文学の融合を試みたシューマンは言うまでもなく、ヴァーグナーにも熱心に読まれており、19世紀後半の音楽家に最も大きな影響を与えた作家のひとりだと言えるだろう。ブラームスもときおり友人への手紙に「若きヨハネス・クライスラー二世」と署名し、15歳の時からの読書ノートに『若きクライスラーの宝物の小箱』と名づけるほど、ホフマンをはじめとするロマン主義文学、さらにはゲーテ、シラー（1759～1805）の古典主義文学の世界にも親しんだ。当時の精神世界を代表するこれらの文学に触れ、自己形成の一步を踏み出したことは、ブラームスのその後の人生と芸術に深い影響を残すことになる。

ゲーテが青春の書と謳われる『若きヴェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers*）を出した1774年、この時代を語るに欠かせないひとりの人物が、バルト海沿岸の小さな港町グライフスヴァルト、に生まれた。19世紀前半にザクセン選帝侯国の首都ドレスデンで華開いた、ドイツ・ロマン主義絵画を代表する画家となったC. D. フリードリッヒ（1774～1840）がその人だが、彼の遺したバルト海、冬景色、そして荒れ野に立つ木などをモチーフにした数多くの風景画は、同じ北ドイツ生まれのブラームスの音楽に通底する、崇高

さや諦念といった宗教的感情をたたえている。

ここで社会の出来事に目を転じると、1842年5月5～8日、まさにブラームスが9歳の誕生日を迎えた時、ハンブルクは大火に見舞われ市街の三分の一が消失してしまうという壊滅的な打撃を受けた。5日夜、港に面した倉庫の火災に端を発したこの火事では、死者51人、焼失家屋1749、焼失倉庫102、被災者およそ2万人という記録が残ることになった。パリで革命思想家に育っていき、祖国ドイツの旧態依然たる状態に絶望の度を深めていたハイネも、この大火の報せを聞いて悲嘆している。

ブラームスが生まれた頃は、政治的に「三月革命前」(Vormärz)と呼ばれている。一方この時期は政治に背を向け、小市民的な簡素で穏やかな家庭の営みを生活様式にした人びともいたので、彼らが好んだ家具調度の様式を示すために用いられた言葉で「ビーダーマイアー」(Biedermeier)とも呼ばれる。しかし1840年代にはいると、復古体制からの脱却を求め、自由かつ平等な社会の実現を目指す運動が、市民階級、学生、労働者階級、「若いヘーゲル派」の哲学者、文学者などによってドイツ各地に燎原の火のように広がっていった。国内の検閲を免れたハイネなどの亡命文学者たちの政治詩も、しだいに先鋭な傾向を帯びるようになる。彼の詩にうたわれ、のちにはハウプトマン(1862～1946)の戯曲『織工』(*Die Weber*) (1892)でも扱われた、1844年のシュレーゲン地方の織工暴動は、ドイツの労働者階級と資本家との階級対立を顕在化させた。自由を求める市民階級も、今や激動のパリから届く革命という起爆剤を待つばかりだった。

### III

革命直前の時代のウィーンに一瞥をあたえると、そこには階層の別なくダンスに興じる人びとの姿が見られる。ウィーン郊外にはあいついでダンスホールが建てられ、そこでは貴族社会のメヌエットやポロネーズに代わって、熱狂的にウィンナ・ワルツやポルカが踊られた。この背景には経済活動によって裕福になった市民階級の台頭があるが、政治に背を向ける彼らの生き方はメッターニヒ体制にとっては好都合だった。

1848年2月7日、ついにパリで革命が勃発した。選挙をめぐる政治問題が原因だったが、この革命はまたたくまにヨーロッパ各地に波及した。3月13日にはウィーン、続く19日にはベルリンで革命が起きた。ウィーンでは民衆と労働者とともに、学生が学問の自由と弾圧の中止を求めてデモに立ち上がった。検閲・出版の自由が勝ち取られ、憲法の制定も約束された。メッターニヒも退陣しロンドンに亡命するなど、革命は成功するかに思えた。しかし、この「青きドナウの乱痴気」も長くは続かず、結局10月31日の皇帝軍のウィーン入城、そしてその後の激しい市街戦によって、ウィーンは血の海と化し、革命は完全に鎮圧された。この革命失敗の最大の原因としては、革命の主体となった知識人や学生と、産業革命の遅れから十分に組織されていなかった労働者階級との精神的な不統一が挙げられるだろう。

ベルリンでも反動的支配体制を屈服させることによって、革命派は勝利を収めたかに見えた。5月に自由主義者たちによって召集されたフランクフルトの国民会議では、憲法制定とドイツ統一のあり方がはじめて具体的に論じられた。しかし、およそ1年にわたって論議を重ね、徒に時を費やしている間に、こちらも力を取り戻した政府軍によって巻き返されてしまった。

その後ドイツとオーストリアは再び反動の時代に入る。その時代、もっぱら経済的繁栄を目指したドイツの市民階級は、好景気の波にも乗り新たな躍進の礎を着々と築いていった。1835年にニュルンベルクとフュルト間のわずか6キロで営業を開始した鉄道が、革命の1年後には、すでに6000キロの線路網をドイツ各地に張りめぐらせるなど、この時代のドイツの科学技術の進歩には、目を見張らせるものがある。革命後のオーストリアでは、1848年12月フェルディナント一世が退位、甥のフランツ・ヨーゼフ一世が18歳の若さで即位する。ドイツ統一のあり方をめぐって、オーストリアの「大ドイツ」主義とプロイセンの「小ドイツ」主義が覇権を争うなか、帝国内に民族問題を抱え旧態依然たる体制を続けるオーストリアに比べ、憲法を制定し、富国強兵に努めたプロイセンが圧倒的優位に立つようになる。

文学に目を向けると、写実主義のみならず、オーストリア文学を代表する作家、シュティフター（1805～1868）とグリルパルツァー（1791～1872）の活躍

がこの時期と重なる。二人ともウィーンで3月革命を体験し、当初は感激するものの、やがては批判的な姿勢を取るようになった。公務に就きながら執筆活動を続けた二人の作品は、憂愁をたたえており、そこからは凋落の帝国に寄せる深い諦念も読み取ることができる。

「音楽の都ウィーン」が、ワルツやオペレッタぬきには考えられないように、ネストロイ（1801～1862）の大衆劇をぬきにしてはオーストリアの演劇は語れない。検閲の網を巧みに潜り抜けながら、したたかに、皮肉っぽく社会を風刺し挑発するネストロイの「軽さ」は、オペレッタに劣らず、ウィーンの観客に圧倒的に支持された。

ブラームスがはじめてウィーンにやって来たのは、そのネストロイが世を去った年だった。

#### IV

ブラームスがはじめてウィーンにやって来た年、世紀末のウィーンを代表することになる芸術家たちの第一世代とも言うべき、シュニッツラー（1862～1931）とクリムト（1862～1918）が生まれている。もはや無用の長物となっていた中世以来の市壁も、1853年のフランツ・ヨーゼフ皇帝の暗殺未遂事件の結果取り壊されることになり、ウィーンの街並みも徐々にその姿を変えつつあった。旧市街を取り巻く「リング」と呼ばれる環状道路も1865年にその一部が完成し、5月1日には華やかな式典が催された。政治的には凋落の一途をたどる帝国にあって、文化はいよいよ成熟に向いはじめる。1866年、プロイセンの「小ドイツ」主義とオーストリアの「大ドイツ」主義が、共に戦った対デンマーク戦争の戦後処理を巡って、とうとう雌雄を決することになる。しかし、質・量共に優位にあったプロイセン軍の勝利は火を見るより明らかで、この戦争はケーニヒグレース（現チェコ領）の戦いでオーストリア軍の大敗に終わった。プロイセン軍の死者9000人に対して、オーストリア軍の死者は44000人にも上った。その結果オーストリアはドイツ統一の枠組みから除外され、さらに国力を強化したプロイセンは1870年の普仏戦争にも電撃的勝利を収め、翌1871年1月ドイツ国民の宿願であった統一ドイツ帝国を成立させた。

そんな敗北とはうらはらに、空前の建築ブームに沸くウィーンは近代的な首都としての体裁を整えていく。1867年、シュテファン広場の角グララーベンの入口にウィーン初のデパートが誕生。1869年には宮廷歌劇場が完成し、5月25日にモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』（*Don Giovanni*）の壮麗な上演によって開場した。手狭になって不評をかこっていたケルトナートーア劇場に代わるこの劇場は、ロビーと観客席の広さで聴衆から広く支持された。翌1870年にカール広場にウィーン楽友協会の建物が竣工、1872年には王宮北門前のミヒャエル広場から北に走るヘレン街6番地にベーゼンドルファー・ザールが誕生し、その後の40年余りにわたるウィーンの音楽生活に欠かすことのできない劇場とホールの三役が揃うことになった。

その頃、戦勝気分には沸き立つドイツにも空前の好景気と投機熱が訪れていた。「泡沫会社乱立時代」（*Gründerjahre*）と呼ばれるこの時期には、株式会社設立のブームが到来し、一獲千金を夢見る人たちがこぞって独立した会社を作った。

しかしバブルがはじけるのにも時間はかからなかった。ウィーンでは、明治政府が派遣した岩倉具視を特命全権大使とする遣欧使節団も視察した万国博覧会が華々しく開幕した直後の1873年5月、証券取引所で株の大暴落があり多くの破産者が出た。それに追い討ちをかけるようにコレラの流行がウィーンを襲い、博覧会期間中に2983人の死者を数える結果となった。ドイツでも不況が続き、1873年から74年にかけて銀行や泡沫的な会社の倒産が相次ぎ、深刻な社会問題となった。組織されてきた労働者階級による労働運動も次第に盛んになるが、ビスマルクを首班とする政府はいわゆる「アメと鞭」の政策で対処し、新興ドイツ帝国は、ヨーロッパ有数の資本主義工業国への成長の道を驀進して行くことになる。

このビスマルク体制を痛烈に批判する者がいた。当時バーゼル大学の若い古典文献学教授だったニーチェ（1844～1900）は、著書『反時代的考察』（*Unzeitgemässe Betrachtungen*）（1873～76）の冒頭で、戦争の勝利は決して文化の勝利を意味するものではないことを指摘し、来たるべきドイツの精神的破局に警鐘を鳴らしていたのだ。

V

「万国博覧会と株の大暴落」、という光と影の交錯のなかにはじまったウィーンの世紀末は、あらゆる文化領域にわたって夥しい数の才能を輩出している。建築ではオルブリヒ（1867～1908）、ロース（1870～1933）、ホフマン（1870～1956）。文学ではホーフマンスタール（1874～1929）、クラウス（1874～1936）、リルケ（1875～1926）、ムーヅル（1880～1942）。思想ではフロイト（1856～1939）、ヴァイニンガー（1880～1903）。音楽ではマーラー（1860～1911）、ツェムリンスキー（1872～1942）、シェーンベルク（1874～1951）。彼らのほとんどが、世紀末のはじまったところに生を受けている。彼らは世紀末から現代のはじまりにかけて、旗幟を鮮明にし、伝統と対決することになる。

リング沿いには旧陸軍省、美術史博物館、自然史博物館、国会議事堂、市庁舎、ウィーン大学本館と、あたかも建築物の博物館のように、過去のさまざまな時代を代表する建築様式で公共建築が造営された。われわれが現在ウィーンを訪ねると目に飛び込んでくる街の顔は、リングの大改造が着手されてからおよそ30年後の1888年、ブルク劇場の完成によって整えられた。ブラームスも宮廷歌劇場が開場した1869年からウィーンに定住、71年にはカール街4番地のアパートに居を定める。ヴァーグナーが昇竜の勢いのドイツ帝国のバイロイトに終の住まいを見つけ、ブラームスが凋落のオーストリア＝ハンガリー二重帝国の首都ウィーンを放浪の末の定住地としたことは、19世紀末のドイツ語圏音楽界の勢力を二分した二人の音楽を象徴している。

ウィーンの街の姿の変貌とともに、社会も大きなうねりを見せながら変化していた。急速に膨張するウィーンには多民族を抱えた帝国の各地から職を求め、あるいは一儲けを当て込んで引きも切らずやって来る人びとが、新たに編入された市区に住み着きはじめた。当時まだ隠然とした勢力を保っていたハプスブルクの旧貴族たち、着実に財を成した新興市民階級、そして今やって来た下層階級との間に対立が起こらないはずはなかった。

1888年、ウィーンの南西30キロ余りの小さな町ハインフェルトで、社会民主党の結成大会が開かれた。その翌年、そこからほど遠くないマイヤーリングで、



## ブラームスの時代（堀内）

オーストリア皇太子ルードルフの情死事件が起こる。1890年になって19区にまで拡大されたウィーンの人口は136万人余りを数える。この年の5月1日には、プラターで第1回のメーデーも開催された。このメーデーを見た16歳の高校生ホーフマンスタールはこう書いている。「民衆が通りで騒いでいる いいとも、騒ぐがままにさせておけ 彼らの愛は卑しく、その憎悪はおぞましい！ われわれはひたすら美的なものにいそしもう 不安に襲われたなら熱い美酒がある 通りの民衆は騒ぐままにさせておけ 叫びと罵り、スローガン、いつわり、みせかけ——すべてはすみやかに消え失せて、ただ美がのこる」（池内紀訳）

## おわりに

ロマン派文芸を育てた閉鎖的なサロンに代わって、ウィーンにはカフェが登場し、そこを根城にするアルテンベルク（1859～1919）のような文士さえ誕生した。若い知性が気ままに、ジャンルを越え自由に語り合うことなしには、絢爛たる世紀末文化は花開かなかっただろう。ハンブルクに生まれウィーンでキャリアを築いたブラームスは、その開花を待たずして1897年4月3日息を引き取った。クリムトを会長とする「ウィーン分離派」（Wiener Secession）が結成されたのも同年。宮廷歌劇場の芸術監督に任命されたマーラーも、10月にはかつてのブラームスのようにハンブルクからやって来た。ウィーンが精神の「聖なる春」（Ver Sacrum）を謳歌する時も間近に迫っていた……。

付記：本稿は、大阪「いずみホール」で内外の演奏家によって、1995年9月から翌96年1月までの5回シリーズで開催される、『ブラームスの散歩道』のプログラムのために準備された原稿に加筆したものである。

ブラームスの時代（堀内）

主要参考文献

- 佐藤晃一：ドイツの文学，明治書院 1967.  
山下 肇：ドイツ文学とその時代，夢の顔たちの森，有信堂 1976.  
三宅幸夫：ブラームス，新潮社 1986.  
藤本淳雄、他：ドイツ文学史 [第2版]，東京大学出版会 1995.  
R. ヴァイゼンベルガー（編）：ウィーン 1890-1920，芸術と社会，岩波書店 1995.  
Hans Joachim Neidhardt : Caspar David Friedrich und sein Kreis.  
Nihon Keizai Shimbun 1978.  
Frédéric Delouche : Histoire de l'Europe -Paris : Hachette 1992.